

<酔いどれ科学者ギャロウェイ・ギャラガーの憂鬱>

第5話

# 機械仕掛けの

Ex Machina

ヘンリー・カットナー

佐藤正明 訳

原作初出: Astounding Science Fiction, April 1948

翻訳初出: 宇宙気流(SFM同好会)No.91, 2019年5月

「『わたしを飲んで』というラベルの壘を見て  
そう思ったんだ」ギャラガーが弱々しく言っ  
た。「ぼくは専門の技術者なんかじゃない。酔  
っぱらっているときのぞいてな。電子と電  
極の違いもわからない。一方が目に見えない  
ということのをぞいてな。ときとしてわかる  
こともあるんだが、ごっちゃになってしま  
うんだ。ぼくの問題は意味論にある」

「問題は、あなたが飲んでくれたということ  
です」透明なボディのロボットがそう言い、  
ガシャンと小さな音をたてて脚をくんだ。ギ  
ャラガーはたじろいだ。

「あながちそうともいえない。飲んでい  
きはうまくいつている。ぼけてしまうのはし  
らふのときだけさ。技術的な二日酔いになる  
んだ。眼球の房水が徐々にしみでてきてい  
るんだ。筋がとおっているだろ」

「いいえ」とロボットが言った。その名はジ  
ョーという。「あなたは泣きついていて  
るんです。それだけのことです。ただ聞き手がほしいか  
ら、わたしのスイッチをいれたんでしょ  
う。わたしはいま忙しいんです」

「なんで忙しいんだ」

「哲学を掘り下げているのです、本質的にね。  
あなたたち人間はまったくおぞましい存在で  
すが、ときとして気のきいた考えを思いつく

ことがある。純粹哲学の明快で知的な論理は  
わたしにとって啓示そのものです」

ギャラガーは寶石のようにきらめく激しい  
炎がどうかと言った。彼はまだ散発的に涙  
を流し、それが『わたしを飲んで』のラベル  
の壘を思いおこさせ、それがカウチのわきに  
あるカクテル・オルガンを思いおこさせた。

ギャラガーは長軀をぎくしゃく動かして研究  
室を横切り、発電機のモンストロとバブルス  
と思われる三台の大きな物体をよけて通った。  
ただ、三台もあるという事実はおいておくと  
して。このことがギャラガーの頭の中をぼん  
やりとよぎった。発電機のひとつが彼を見て  
いたので、彼はいそいで視線をそらし、カウ  
チに身を沈めて、いくつかのボタンを操作し  
た。チューブからは渴いた喉に一滴のアルコ  
ールも流れてこなかった。マウスピース  
をはずして絶望的なまなざしで見つめ、  
それからジョーにビールをもってくるように  
命じた。

グラスを持ち上げて口に当てたときは、中  
身がなみなみとつがれていた。だが、彼が飲  
むまえにグラスは空になっていた。

「こいつはなんとも奇妙だ」ギャラガーは言  
った。「タンタロスになった気分だ」

「だれかがあなたのビールを飲んでい  
る」と

ジョーが説明した。「もう、わたしをひとりにしてくれませんか。哲学の神髄をきわめたあとだと、なおさらわたしのブロック様式の美しさを賛美できそうな気がするのです」

「そうだろうよ」ギヤラガーは言った。「鏡から離れる。だれがぼくのビールを飲んでるんだ。緑色の小人か？」

「小さな褐色の生き物です」ジョーがあいまいに説明をして、また鏡のほうを向いた。残されたギヤラガーはいまいましげにジョーをにらみつけた。ギヤロウエイ・ギヤラガー氏は、ジョーを塩酸の滴がぼたぼたしたたるところにしっかりと縛りつけておきたいと、何度も切望した。かわりに、彼はもう一杯ビールをたのんでみたが、同じ不運にみまわれた。

カッとしたギヤラガーは立ち上がってソーダ水を調達した。小さな褐色の生き物はそうした飲み物には、当のギヤラガー以上に食指が動かなかつた。とにかくソーダ水はふしぎな消失をしなかつた。喉の渇きは多少おさまったが、ますます困惑したギヤラガーは、あかるい青い両眼をもつ第三の発電機のまわりを回って、気むずかしそうにその装置を調べながら、作業台をかきまわした。中身のよくわからない壘が数本あった。あきらかにアルコールではないが、貼られたラベルはほとんど

ど意味をなしていなかった。昨晚のアルコールで解放されたギヤラガーの意識下の自我が見てすぐにわかるようにしるしをつけておいたのだ。ギヤラガー・プラスは、最高の技術専門家であるが、世界を歪みきつたレンズを通して見ていたので、ラベルは助けにならなかった。ひとつは「ウサギ専用」、別のは「いいとも!」。また別のは「クリスマス之夜」。

ほかに、車輪やら歯車やらチューブやら鎖歯車やら電気のコンセントにつながった発光管やらが、複雑にからまった代物があつた。「コギト・エルゴ・スム(我思う故に我あり)」とジョーがつぶやいた。「中庭であたりになれもない場合。否。ふーむ」

「この小さな褐色の生き物はなんなんだ」ギヤラガーが知りたがつた。「現実なのか、それとも単なる幻影なのか」

「現実とはなんでしょう」ジョーがたずねた。これで論点はさらにこんがらがつた。「そのことについて、まだわたし自身が満足いくような結論にはいたっていません」

「おまえの満足だと!」ギヤラガーが言った。「ぼくは二日酔いの十乗で目を覚ましたのに、迎え酒の一杯も持ってこられないじゃないか。おまえはぼくの酒を盗む小さな褐色の生き物のおとぎばなしをするしまつた。そして、か

びの生えた哲学の概念をぼくに引用してみせるとは。もしぼくがあそこにあるボールを手にしたら、あつというまにおまえは存在することも考えることもしなくなるさ」

ジョーはいさぎよく折れた。「そいつは小柄な生物で、ひじょうに速く動きます。速すぎて見る事ができません」

「おまえはどうして見る事ができるんだ」「見ていません。ヴァリツシュするんです」とジョー。彼は人間にそなわっている五感よりも多くの感覚をもっていた。

「そいつはいまどこにいる」「すこしまえに出ていきました」「それじゃあー」ギヤラガーはとっかかりをはずされて言葉を探した。「昨晚なにかが起きたに違いない」

「もちろんです」ジョーが同意した。「しかしあなたは、あの耳がついた醜い男が来たあと、わたしのスイツチを切ってしまいました」

「それは覚えてる。おまえはそのプラスチック製の無駄口をたたいたから……どんな男だつて?」

「醜い男です。あなたは、お爺さんにも散歩してくるようになりました。でも酒壘をとりあげることできませんでした」

「爺ちゃんだと。うー。おお。爺ちゃんはどう

「こだ」

「たぶんメーンに帰りました」ジョーが言った。「彼は帰っちまうぞと、ずっとおどしてました」

「爺ちゃんは酒蔵を飲み干すまで帰らないさ」ギヤラガーは言った。彼は音響システムのスイッチを入れると、家の中の全室にむけて呼びかけた。応答はなかった。やがてギヤラガーは腰をあげて探し回った。爺さんの手がかりはなかった。

彼は研究室にもどると、大きな青い目をもつ第三の発電機を見ないようにしながら、あきらめ気味に作業台をもういちど念入りに調べた。ジョーは鏡の前でポーズをとりながら、自分は主知主義の基本理念を信じていると思うと言った。さらにつけくわえて、あきらかにギヤラガーの知的能力はまだ停止中なので、プロジェクトをつないで、昨晚何が起きたか確かめたらいいかもしれないと言った。

これは筋が通っていた。しばらくまえに、しらふのギヤラガーは酔っぱらいのギヤラガーの冒険をまったく覚えていないことに気づいて、視聴覚装置を研究室に取りつけて、状況が妥当だと判断されるときにはいつでも自動的にスイッチが入るようにうまく調整しておいた。どうやってその機械が作動するのか、

いまとなつてはギヤラガーにもよくわからないかったが、機械製作者に対して奇跡のような血中アルコール・テストを一通り行うことができ、その濃度がじゆうぶん高いときは記録を開始するということだけはわかっていた。いまのところ機械は毛布におおわれていた。ギヤラガーはそれをひっぱがし、スクリーンの向きをかえて、昨夜なにが起きたかに目と耳を集中させた。

ジョーは部屋のすみに立っていて、スイッチは切られていたが、たぶん考えごとをしているのだろう。褐色の顔をしたしわくちやの小柄な男が爺さんで、まるで機嫌の悪いくろみ割り人形のようなだった。酒壇をかかえてツールにすわっていた。ギヤラガーはカクテル・オルガンのマウスピースを唇から離れたところで、もうレコーダーを作動させるにじゆうぶんな酒量を摂取している様相だった。大きな耳を持つ、やる気じゆうぶんな顔つきをした細身の中年男が、休憩椅子に浅く腰掛けて、ギヤラガーを見ながらいらいらしていた。

「くだらん」爺さんがきいきい声で言った。「がきのころ、わしらは外に出たら素手で灰色熊を殺したもんだ。こんな奇をてらった思

いつきなどなくたって——」

「爺ちゃん」ギヤラガーが言った。「だまってくれ。あんたはそれほど年とつちやいな。それに、どのみちあんたは嘘つきだ」

「森に行ったら灰色熊が向かってきたときのことを思い出すよ。わしは丸腰だった。よし、話してやろう。やつのが口が間近に迫っている——」

「酒壇がからっぽだよ」とギヤラガーがうまく口をはさんだ。それで爺さんがびっくりして確かめるのにすこし間があった。空ではなかった。

「あんたはとてもお褒めの人物だということだった」やる気男が言った。「わしを助けられると期待しておる。わしと共同経営者はほとんど万策つきておるんだ」

ギヤラガーは相手をぼうつと見た。「共同経営者がいるんですか？ それはだれですか？ ついでにお聞きしますが、あなたはだれですか？」

やる気男が困惑と戦っているあいだ、沈黙が降りた。爺さんが酒壇をおろして言った。「空じゃなかったぞ。だが、もう空だ。お代わりはどこだ」

やる気男が目をしばたいた。「ギヤラガーさん」と力なく言った。「わけがわからん。わ

しらは話し合ったはずでしょう——」

ギヤラガーは言った。「わかってます。すみません。ただ、技術的な問題がまるでだめなんですよ……その……高ぶっていないときのぼくはね。そうなったときのぼくは天才です。でも、ひどく忘れっぽいんです。きっとあなたの問題を解決することができません。でも、実は問題が何かを忘れてしまったんです。最初から話していただいたらどうかと。あなたは何者ですか。すでにぼくにいくらか支払っているのでしょうか」

「わしはジョナス・ハーディング」やる気男は言った。「ポケットに五万クレジット入っておる。だが、わしらはまだ話がなにもついておらん」

「それではその現なまをください。そうすれば話がつくでしょう」ギヤラガーが欲望を隠しきれずに言った。「金がいるんです」

「確かにそのとおりじゃ」爺さんが酒壺をさがしながら口をはさんだ。「引き出し超過だから、銀行はおまえが来るのを見たらドアに鍵をかけちまう。酒をくれ」

「カクテル・オルガンを使えよ」ギヤラガーが提案した。「さて、ハーディングさん——」

「酒壺がいいんだ。おまえが作ったその何たらからくりは信用ならん」

ハーディングは、そのじゆうぶんなやる気にもかかわらず、ふくれあがる疑念を隠しきれなかった。「この現金についていえば」と彼は言った。「まず、少し話し合ったほうがいかもしれない。きみはとてもお奨めの人物だということだった。きょうはたぶん調子のよくない日なんだろう」

「そんなことありません。まだ——」

「どうして、話がつくまえに金をわたさなければならぬかね」ハーディングが指摘した。

「ことに、わしがだれで、何をして欲しいかを忘れてしまっているというのに」

ギヤラガーはため息をついて、あきらめた。

「いいでしょう。教えてください。あなたが何で、だれをして欲しいのかを。いや、言いたいのは——」

「わしは家に帰るぞ」爺さんがおどした。「酒壺はどこだ」

ハーディングが耐えきれなくなって言った。「いいか、ギヤラガーさん。ものには限界がある。わしがここに来ると、おまえのロボットがわしを愚弄する。おまえの爺さんはいっしょに酒を飲もうとせがむ。頭がおかしくなりそう——」

「わしはトウモロコシ・ウイスキーで育てられたんじゃ」爺さんがぼそぼそ言った。「凍垂

れ小僧どもには飲めんじやる」

「それでは仕事の話に取りかかりましょう」ギヤラガーが快活に言った。「だいぶ気分がよくなってきました。このカウチにすわっていただければすっかり落ち着きますから、何もかも話してください」彼はくつろいで、カクテル・オルガンのマウスピースをだらしなく吸った。ジン・バックがちよろちよろ出てきた。爺さんが悪態をついた。

「さて」ギヤラガーが言った。「あらいざらい、最初からお願いします」

ハーディングは小さくため息をついた。「いだろう——わしはもうひとりとアドレナルス社を経営している。サービス事業を営んでいる。時代に合わせたぜいたくなサービスだ。前に言ったように——」

「ぜんぶ忘れました」ギヤラガーがつぶやいた。「資料のコピーをいただければよかったです。あなたがやっているのは何ですか。わたしには、あなたが腎臓のてっぺんにちっぽけなプレハブの家を建てている、馬鹿げた光景が思い浮かんだのですが、きっとぼくは間違ってますよね（訳注…アドレナルは副腎）」

「そうだと」ハーディングがそっけなく言った。「これがきみのためのコピーだ。わが社

は副腎刺激ビジネスをやっている。今日、人は平穏で安全な生活を送り——」

「ほう！」ギヤラガーが辛辣なあいづちをはさんだ。

「——そのために安全管理やら安全装置やら医学の進歩やら、社会生活の基本構造やらがある。さて、副腎は生命維持に関する機能的な目的に役立つっており、正常な人間の健康になくしてはならないものだ」ハーディングはあきらかに慣れたセールス・トークに入りこんでいた。「そのむかし、われわれが洞窟で暮らしていたころ、剣歯虎がジャングルから飛び出してくると、われわれの副腎あるいは腎上腺は、すばやく活動を開始して組織にアドレナリンをみなぎらせた。瞬時の爆発的な行動が起こり、戦闘か逃走のいずれかにかりたてる。そうした間欠的な血流の増進が全組織を正常に保ったのだ。心理的な利点はいうまでもない。人間は競争の動物だ。その本能を失いつつある。だが、副腎の人工的な刺激によってそれを目覚めさせることができる」

「酒か？」爺さんが期待をこめて言った。ハーディングの説明はほとんど理解していなかったのだが。

ハーディングが抜け目ない顔つきになった。密談でもするように身を前にのりだした。

「魅力だよ」と彼は言った。「それが答えだ。われわれは冒険を提供する。安全で、スリル満点で、ドラマチックで、刺激的で、魅力的な冒険を、疲れ切った現代の男女に与えるのだ。テレビのなかで身代わりが体験する、満足のいかない興奮ではない。ほんものだよ。アドレナリス社はひとつ上の冒険を提供し、同時に体と心の健康を増進させるのだ。わが社の広告を見ているはずだ。△型にはまった日々にはあきあきでしょう。疲れはてた生活にはうんざりでしょう。狩りに出ましょう——そして、元気で幸福で健康になってもどつてきましょう。世界を向こうにまわす準備はできています！」

「狩りだって」

「それがわしらのもつともお奨めのサービسد」ハーディングが事務的な口調にもどって言った。「たしかにそれは新奇なものではない。そのむかし、旅行会社はメキシコでのスリリングな虎狩りを宣伝していたが——」

「メキシコに虎はおらん」爺さまが言った。

「わしは行ったことがある。いいか。もし、酒壇を見つけてくれなければ、わしはメインにまっすぐもどるからな」

しかし、ギヤラガーは問題のほうに集中していた。「それではなぜぼくが必要なのかわか

りません。わたしに虎を供給することなどできません」

「メキシカン・タイガーは実際にはネコ科の仲間だった。ピューマだろう。われわれは世界中から特別予約をとりつけた——立ち上げと維持にかなりの費用をかけてな——そして狩りを行った。事前にすみずみまで注意を払って計画を立てたのだ。危険は最小限にしなければならぬ——事実、危険は排除した。それでも見せかけの危険はなければならぬ。でない」と顧客にはスリルがないからな。わしらは動物を訓練して人を傷つける寸前にとどまるようにしようとした。だが……ああ……そいつはあまりうまくいっていない。残念なことに顧客を何人か失った。これには大金をつぎこんでおり、それを回収しなければならぬ。だが、虎どころかそれ以外のどんな大型の肉食獣も使うことができないとわかった。どれもけっして安全ではないのだ。だが、そうした見せかけの危険はなくてはならぬ！困ったことに、わしらはクレール射撃クラブになりさがっているのだ。クレール射撃にともなう身の危険などありはしない」

爺さまが言った。「おもしれえこと探してるのか、え？ わしといっしょにメインに來い。そしたら、ほんものの狩りを見せてやる。山

奥にはいればまだ熊がつかまるんだ」

ギヤラガーが言った。「わかりはじめたぞ。だが、その個人的観点は——さっぱりだ！とにかく、危険の定義って何なのだろう」

「危険ってえのは、何かがおまえをとっつかまえようとするときのことだ」と爺さまが指摘した。

「未知のこと——非日常的なこと——は、それを理解できないというだけの理由で、危険でもある。それで幽霊話がいつも人気があるんだ。暗闇のうめき声は昼間の虎よりもこわいからな」

ハーディングがうなずいた。「なるほど。だが、別の要素がある。ゲームはあまり易しく作ってはだめなんだ。ウサギを出し抜くのは朝飯前だ。それに、当然だが、われわれは顧客に最新式の武器を支給しなければならぬ」

「どうして」

「安全上の予防策さ。困ったことに、こうした武器と走査機と臭気分析器を使えば、どんな馬鹿でも獲物を追いつめて仕留めることができる。獲物が人食い虎でなければスリルは実感できないし、それではうちの出資者たちにとっては、ちよつとばかりスリリングすぎるだろ！」

「それで、あなたの望みは？」

「わからん」ハーディングがゆっくり言った。

「新しい動物なのか。アドレナルス社の要求を満たしてくれる何かだ。だが、その答えが何なのか、わたしにはわからん。そうでなければ、きみに頼んだりしてないだろう」

ギヤラガーが言った。「空中から新しい動物を作り出したりはしない」

「どこから手にいれるんだ？」

「そうだなあ。ほかの惑星か。ほかの時間領域か。ほかの蓋然世界か。以前、未来の火星に波長を合わせて、リブラスというおかしな動物をつかまえたことがある。だが、期待はずれだった」

「では、どこかほかの惑星はどうだ」

ギヤラガーは立ち上がって作業台のほうに歩いていった。ばらばらの歯車や金属管をつなぎあわせはじめた。「考えがまとまりだしたぞ。人間の脳に本来そなわっている潜在因子だ——ぼくの潜在因子が覚醒しつつある。待ってくれ。おそらく——」

彼の手の下で装置が組み上がっていく。ギヤラガーは没頭していた。やがて彼は毒づくど、装置をわきに押しやって、カクテル・オルガンのところに舞いもどった。さきに爺さまがそれを試していたが、ジン・バックの最初のひとすりでむせかえった。彼は故郷に

帰るぞ、ハーディングを連れて行ってほんものの狩りを見せてやるんだとおどした。

ギヤラガーは厄介老人をカウチからどかした。「さて、いいですか、ハーディングさん」と彼は言った。「あしたにはあなたのためにこの装置を用意しましょう。すこし考えていることがあるので——」

「酒のことか」ハーディングがそう言って、札束をとりだした。「きみについては、いろいろと聞いているよ、ギヤラガーくん。きみは追いつめられないと仕事をしないということだ。期限をつけておかないと、仕事をやるうとしないとか。それでは——これがわかるか。五万クレジットだ」彼は腕時計に目をやった。「きみに一時間あげよう。それまでにわしの問題を解決してくれなければ、この取引は中止だ」

ギヤラガーはまるでかみつかれたかのように驚いてカウチから立ち上がった。「むちゃくちゃだ。たった一時間で——」

ハーディングは冷たく言い放った。「わたしはきちょうめんな人間だ。きみについては、そういう人間でないと気づく程度はわかっているつもりだ。ほかの専門家や技術者を見つかることもできるんだよ。一時間だ！ だめならば、わたしはあのドアから出ていくことにな

る。この五万クレジットを持ってな！」

ギヤラガーはものほしげにその金を見た。彼ははいそいで喉をうるおすと、小声で毒づき、装置のほうにもどった。今度はそれにかかりきりになった。

しばらくして、光が作業台から放たれてギヤラガーの目を直撃した。彼は悲鳴をあげてうしろによるめいた。

「大丈夫か」ハーディングがさつと腰をあげてたずねた。

「へいきだ」ギヤラガーがうめいて、スイッチを切った。「わかってきたぞ。その光が……痛い。目玉が日焼けした」彼はまばたきして涙を隠した。それからカクテル・オルガンのほうに行った。

存分飲んでから、彼はハーディングにむかってうなずいた。「あなたが求めているものをとらえつつあります。どれくらいかかるかわかりませんが」彼は顔をしかめた。「爺ちゃん、この機械の設定を変えたか？」

「わからん。ボタンを二つ三つ押したぞ」

「そんなことだと思つた。こいつはジン・バツクじゃない。わおー！」

「麦酒が出てきたのか？」と爺さまはたずね、興味をわいて、もう一度カクテル・オルガンを試そうとやってきた。

「そうじゃない」ギヤラガーはそう言い、ひざまずいてレコーダーのほうにじり寄った。

「こいつは何だ。スパイか、ははん。この家の中にいるスパイどもをどう扱えばいいかわかっているぞ、この汚い裏切り者め」そう言いながら、彼は立ち上がり、毛布をつかみ、プロジェクトアの上にそれを投げかけた。

その時点でスクリーンは、当然のことながら、空白になった。

「いつもいつも、うまいことぼく自身の裏をかくもんだ」ギヤラガーはそう口にする、立ち上がってプロジェクトアのスイッチを切った。「ぼくはわざわざそのレコーダーを作っておいて、いざ事がおもしろくなつたときにそいつを目隠ししちまうんだから。前よりもわからなくなっている。いまは未知の要素がふえているからな」

「人は物事の本質を知ることができません」ジョーがつぶやいた。

「重要な概念だな」ギヤラガーが認めた。「だが、ギリシア人のほうがちょっと前にそのことを発見しているよ。近いうちに、もしおまえが一生懸命考え続けていけば、二足す二が四だという大発見にたどりつくことだろう」

「静かに。この醜悪な人間よ」ジョーが言っ

た。「わたしはいま、抽象概念に入りはじめています。玄関の対応に出て、わたしのことは放っておいてください」

「玄関だと。なぜだ？ ベルは鳴ってないぞ」「すぐに鳴ります」ジョーが指摘した。「ほら、鳴っています」

「朝のこの時間の来客という」とギヤラガーはため息をついた。「たぶん爺ちゃんだろうが」彼はボタンを押して玄関スクリーンに目をこらしたが、もじやもじや眉であごのどがった顔がだれなのかわからなかった。「どうぞ」彼は言った。「お入りを。標示の通りに進んでください」それから彼は喉の渇きを覚えてカクテル・オルガンのほうを向いたが、目下のタレントロスの状況を思い出した。

とがりあごの男が部屋に入ってきた。ギヤラガーが言った。「急いでくれ。いまぼくは、酒を全部飲みほしてしまう小さな褐色の生き物につきまとわれているんだ。ほかにもいくつかやっかい事がかかえているが、この小さな褐色の生き物は最悪だ。もし酒を一滴も飲めなければ、ぼくは死んでしまう。だから、あなたの望みを話したら、問題をやつつけるためにぼくをひとりしてくれませんか。あなたに借金してませんよね」

「それはことと次第による」と新来者は言っ

た。強いスコットランドなまりがあった。「わ

しはマードック・マッケンジー。きみはギャラガーさんだな。信用できる人物には見えんな。わしのパートナーはどこにいる。それから彼の持っていた五万クレジットはどこだ」

ギャラガーは考えこんだ。「あなたのパートナーですって？ ジョナス・ハーディングのことでしょうか」

「そいつだ。アドレナルス社のわしのパートナーだ」

「お会いしていませんが——」

いつもの絶妙な口調でジョーが言った。「大きな耳のあの醜い人ですね。彼はなんと醜悪だったでしょう」

「ほんまにそのとおり」マッケンジーがうなずいた。

「おまえが過去形で言っているのは聞き捨てならん。厳密に言えば、おまえのその大層なガチャガチャ機械が言っているんだが。ひょっとして、わしのパートナーを殺して、おまえの科学からくりのどれかで死体を始末しちまったんじゃないのか」

「待つてください——」ギャラガーが言った。

「いったいどういふつもりなんです。ぼくのひたいにカインの印か何かがついていますか。なんでそんな結論にとびつくんです。正気と

は思えません」

マッケンジーは細長いあごをなで、しらがまじりのもじやもじや眉の下からギャラガーを品定めした。「まあ、たいした損失にはならんだろう」彼が本音をもらした。「ジョナスはほとんど会社に貢献していない。きちょうめんすぎる。だが、やつは昨晚ここに来たとき、五万クレジットを身につけていた。死体の問題もある。保険金はもうしぶんないほど莫大な額だ。ここだけの話だが、ギャラガーくん、もしきみがわしの不運なパートナーを殺してあの五万をポケットに入れたのだとしても、そのことをもちだしてきみを非難したりはせん。実のところ、きみを逃がしてやつてもいいと思っっているんだ。そうだな……一万は持たせてやるから、残りはわたししてくれ。だが、ジョナスの死亡の法的な証拠をわしにくれなければだめだ。出資者たちを満足させるためにな」

「論理だ」ジョーがうつとりと言った。「美しい論理だ。そのような濁った醜男から、そんな論理が出てくるとは驚きだ」

「なあ、きみ。わしがそのような透明な皮膚をもっていたら、はるかに不気味に見えることだろうよ」マッケンジーが言った。「人体解剖図が正確だとしたらな。だが、わしらはパ

ートナーのほうの体の話をしているんだ」

ギャラガーは強い調子で言った。「こんなこと馬鹿げている。あなたはおおかた、重大犯罪かたにかを示談にする話もちだしているんだろう」

「それでは容疑を認めるんだな」

「とんでもない！ マッケンジーさん、あなたはぜひぶん自分の考えに自信をお持ちですね。賭けてもいいが、あなたが自分でハーディングを殺して、それをぼくにおつかぶせようとしているんだ。彼が死んだということはどうやって知ったんです」

「なるほど、それにはすこし説明が必要なようだな」マッケンジーが言った。「ジョナスはきちょうめんな男だった。ほんまに。わしの知るかぎり、やつはたとえどんな理由があるうとも、約束をすっぱかしたことはなかった。やつは昨晚、何件か約束があった。今朝もだ。一件はわしとだ。しかも、やつは昨晚きみと会うためにここに来たとき五万クレジットを持っていた」

「彼がここに来たことをどうして知っているんです」

「わしが連れてきたんだ。わしのエアーカーブでな。やつを玄関のところでおろした。中に入っていくのを見ている」

「では、彼が出ていくのは見ていないんですね。でも彼は出ていった」ギヤラガーが言った。

マッケンジーは、すこしも動じず、骨ばった指を折って論点を確認しながら続けた。

「今朝、わしはきみの記録を確認したんだよ、ギヤラガーくん。それはまともなものではなかった。ひかえめに言っても、不安定なものだった。いかがわしい取引にかかわったことがあり、これまでいくつかの犯罪で告訴されている。いずれも有罪だと立証されていないが、きみは裏のあるやつだとわしはにらんでいる。警察も同じ見解だろう」

「警察は事件を立証できませんよ。ハーディングはおおかた家で寝ているんでしょう」

「家にはおらん。五万クレジットというのは大金だ。わしのパートナーの保険金の額はそれをはるかに上回っている。もしジョナスが消息不明のままだったら、事業は凍結の憂き目にあい、訴訟がおきるだろう。訴訟には金がかかる」

「ぼくはあなたのパートナーを殺していません！」ギヤラガーは大声を出した。

「ああ」マッケンジーはうす笑いをうかべた。「それでも、もしきみがやったということを立ててきたら、結果は同じことになるだろう

し、わしにそれなりの利益をもたらしてくれ。自分の立場を考えるんだな、ギヤラガーくん。なぜ、やったと認めない。死体をどう始末したか白状して、五千クレジット持って逃げるがいい」

「さつきは一万クレジットと言ったじゃないですか」

「ばか言え」マッケンジーがきつぱりと言った。「そんなこと言っていない。いずれにせよ、そう言ったと立証することはできません」

ギヤラガーが言った。「それでは、一杯飲んでそのことを話しあうというのはどうでしょう」彼に新しい考えが浮かんだ。

「けっこうな提案だな」

ギヤラガーはグラスをふたつ見つけて、カクテル・オルガンを操作した。一方をマッケンジーに差し出したが、相手はかぶりをふって、もう一方のグラスに手をのぼした。「毒入りかもしれない」彼はぶっきらぼうに言った。「信用のおけん顔つきをしておる」

ギヤラガーはその言葉を無視した。酒を二杯用意すれば、得体のしれない小さな褐色の生き物がその限界を見せるだろうと期待していた。彼はウイスキーをさつとあおった。しかし、欲望をかきたてる一滴が舌をこがしただけだった。グラスは空だった。グラスを置

くと、マッケンジーのほうを見た。

「つまらんトリックだ」マッケンジーはそう言って、グラスを作業台の上に置いた。「きみにウイスキーをくれとは言っとらん。どうやってあんなふうに消してみせたんだ」

期待がはずれて腹を立てたギヤラガーは、どなりつけた。「ぼくは魔法使いだ。悪魔に魂を売ったのさ。虫のいどころが悪けりや、あんたも消しているところだ」

マッケンジーは肩をすくめた。「心配しとらん。もしできるなら、とつくにやっているだろう。魔法に関していえば、わしは疑いをもつてなどおらん。あそこにくずくまっている怪物を見てしまつてはな」彼は発電機とはいえない第三の発電機を指し示した。

「えっ？ あなたにもあれが見えるんですか」  
「わしはきみが考えている以上にものが見えるんだよ、ギヤラガーくん」マッケンジーは脅迫的な口調で言った。「事実、わしはいま警察に行こうとしているのだから」

「待つてください。そんなことしても、あなたにとって得るものは何も――」

「きみと話していても、得るものは何もない。きみがいつまでも強情をはるので、警察に行ってみようとしているんだ。もし警察がジョナスの死んだことを立証できれば、すくなく

とも保険金は受け取れるだろう」

ギヤラガーが言った。「まあ待つてください。あなたのパートナーはたしかにここに来ました。彼はある問題をぼくに解決してもらいたがったんです」

「ほお、それで解決したのかね」

「い、いえ。すくなくとも——」

「それでは、わしがきみから得られるものは何もないな」マッケンジーがきつぱりと言い、玄関のほうに向きなおった。「ほんますぐに、わしから連絡するから」

彼は立ち去った。ギヤラガーはがっくりとカウチに沈みこみ、思いにふけた。やがて目をあげると、第三の発電機を凝視した。

それでは、あれは幻覚ではなかったのだ。最初はそうだと疑っていたのだが。ましてや発電機でもなかったのだ。それは平たくてまとまりのない形をした物体で、まるで融けはじめた台形のピラミッドのようだった。そのふたつの大きな青い目が彼をじっと見ていた。目でなければビー玉か、あるいは着色した金属だ。彼には見定められなかった。それは高さ約三フィート、底面のさしわたしが三フィートあった。

「ジョー」とギヤラガーが言った。「おまえは何でその物体のことを言ってくれなかった」

「見えていると思っていました」とジョーが弁明した。

「見えていたさ。だが——あれは何だ」

「さつぱりわかりません」

「いったいどこからやってきたんだ」

「あなたの潜在意識だけが、昨晚のあなたがしでかしたことを知っています」とジョーが言った。「ことによると爺さんとジョナス・ハーディングが知っているかもしれない。でも、見たところふたりはこのあたりにはいません」

ギヤラガーはテレビ電話のところに行つて、メインに電話をかけた。「爺ちゃんは家に帰っているかもしれない。ハーディングを連れていったなんてありそうもないが、どんな可能性も見逃すわけにはいかない。調べてみる。ひとつ言えるのは、ぼくの涙目がなっていることだ。昨晚ぼくが作ったあの装置は何だったんだ」彼は作業台のほうに移動して、その不可解な寄せ集めをくわしく調べた。「ぼくはどうしてこの回路に靴べらをさしこんだんだ」「あなたがここで使える材料の在庫をそろえておけば、ギヤラガー・プラスは間に合わせの材料に頼ったりはしなかったでしょう」ジョーが手きびしく言った。

「うー。酔えれば、もういちど潜在意識に登場願えるんだが……いや、だめだ。ジョー、ぼくはもう酒を飲めないんだ！ 酒には手も足も出せん！」

「結局ドルトンは的確な認識を得られたのだろうか」

ギヤラガーがどなりつけた。「そんなふう目ん玉を飛び出させなきゃならんのか。ぼくには助けがいるんだ！」

「あなたはわたしの助けを求めたりしないでしよう」とジョーが言った。「問題はきわめて単純です。そのことに集中すればいいんです」

「単純だって？ それなら答えを教えてくださいもいいだろう！」

「まずは、ある哲学的な概念をはつきりさせたいんです」

「好きなだけ時間をかけるがいいさ。ぼくが刑務所で朽ち果てていくあいだに、おまえはひまな時間を抽象概念についてじっくり考えるのに使うことができるさ。ビールをもってきてくれ！ いや、気にするな。どのみち飲めやしない。この小さな褐色の生き物というのはどんなかつこうをしているんだ」

「おや、自分の頭を使いなさい」とジョーが言った。

ギヤラガーがうなるように言った。「頭は錨

として使えるさ。そんな気分だ。おまえは答えをぜんぶ知っている。どうして、むだ口をたたいてばかりいないで教えてくれないんだ」

「人間は物事の本質を知ることができません」  
ジョーが言った。「今日という日は昨日の論理的な発展の結果です。あきらかに、あなたはアドレナルス社がもちこんだ問題を解決しています」

「何だって。ああ、わかったぞ。ハーディングは目新しい動物か何かを欲しがっていた」  
「それで？」

「ぼくはそれをふたつ手に入れた」ギヤラガーが言った。「小さな褐色の目に見えないアル中と、床にすわりこんでいる目の青い珍獣だ。おお、いいぞ！ ぼくはどこからこいつらを捕まえてきたんだ。別の次元からか？」

「どうしてわたしにわかります。あなたが連れてきたんですよ」

「確かにぼくの働きだ」ギヤラガーは認めた。「たぶん機械を作って、こいつらを別世界からすくい上げたんだ——それからたぶん、爺ちゃんとハーディングはいまその世界にいるんだ！ 捕虜交換のようなものだ。わかんない。ハーディングはハンターたちがスリルを感じる程度に捕まりにくい、無害な獣を欲しがっていた——だが、このどこに危険の要素

があるというんだ」彼は息をついだ。「ことによると、この珍獣たちの純粹な異質性はそうした錯覚を与えるかもしれない。とにかく、ぼくは身震いしてるよ」

「アドレナリンによる血流の増進は全身のシステムに緊張を与えます」ジョーが自慢げに言った。

「それでは、どうやらぼくはハーディングの問題を解決するために、どうにかしてこの動物たちを捕獲するか入手するかしたらしいな……ふむ」ギヤラガーは形のはつきりしない青い目の生き物のほうに行って、その前に立った。「やあ、きみ」と彼は言った。

応答はなかった。温和な青い目はあいかわらず何にも注意を向けなかった。ギヤラガーはためしに片方の目を指でつついた。

何もおこらなかつた。目は動かさず、ガラスのように硬かつた。ギヤラガーはその生き物の青みがかつたつやのある皮膚をさわってみた。金属のような感触だった。軽い恐怖感をおさえつけて、その生き物を床から持ち上げようとしてみたが、びくともしなかつた。とてもなく重いのか、あるいは底に吸盤がついているのか、どちらかだつた。

「目か」ギヤラガーが言った。「見たところ、ほかに感覚器官は見当たらない。これはハー

ディングが欲しがっているものじゃない」

「カメくらいの頭はあると思いますよ」ジョーが言いそえた。

「カメだと。うう。アルマジロみたいだ。そのとおり。それが問題じゃないか？ こんな、その……動物をどうやって殺したり捕獲したりすることができんだ。外殻はかちかちだぞ。びくりともしない——それがこいつだ、ジョー。狩りの獲物は飛行とか戦いに頼る必要はない。カメがいい例だ。だからカマスはカメを食おうと必死になることができる。スリルを求めている怠け者の文明人には、こいつは最適の獲物だろう。だが、アドレナリンはどうなる」

ジョーは何も言わなかつた。ギヤラガーは考えこみ、やがて試薬と器具をいくつか手にした。彼はダイヤモンド・ドリルをためした。酸をためした。彼は青い目の動物を目覚めさせるために思いつくあらゆる方法をためした。一時間ほどして、彼の怒りにまかせた悪態はロボットからの発言で中断された。

「ところで、アドレナリンはどうなりました」  
ジョーが皮肉をこめてたずねた。

「だまれ！」ギヤラガーがどなった。「あいつはあそこでじっとぼくを見ているだけなんだ！ アドレナ……何だって」

「怒りは恐怖と同じように副腎を刺激しますよ。人間はだれも消極的抵抗が続いたら激怒すると思います」

「そのとおりだ」汗をうかべたギヤラガーはそう言っていて、その生き物に最後の蹴りをいれた。彼はカウチにもどった。「不快指数をじゅうぶんに増大させれば、怒りを恐怖の代わりにすることができると。だが、あの小さな褐色の生き物はどうなんだ。ぼくはあれには腹を立てていないぞ」

「一杯やっごらんさい」とジョーが提案した。

「そうだな。盗癖のあるだれかさんにぼくは腹を立てている！ あいつは目にもとまらない速さで動くと言っていたな。どうやったらつかまえられるんだ」

「確実な方法があります」

「あいつは、もう一匹の珍獣が不死身なのと同じくらいすばしっこい。酔っぱらわせたら動かなくすることができらるるか」

「新陳代謝です」

「酔っぱらうより速く燃料を使い切らせてしまえばいいのか？ うまくいくかもしれん。だが、あいつは大量の食べ物を必要としているはずだ」

「最近、キッチンをのぞいたことがあります

か」ジョーがたずねた。

「からっぽになった食料貯蔵庫の光景を頭にかべて、ギヤラガーは立ち上がった。彼は青い目の物体のそばで足を止めた。」

「こいつはこれといった新陳代謝はおこなっていない。だが、何か食べるはずだよな。では何を食べる？ 空気か？ 可能性はある」

玄関のベルが鳴った。ギヤラガーがぼやいた。「こんどは何だ」そして客の中に入れた。赤ら顔に敵意をうかべた男は入ってくると、一時的に拘留するとギヤラガーに告げ、仲間を呼び入れた。彼らはただちに家宅捜査をはじめた。

「マッケンジーがきみたちをよこしたんだろう？」とギヤラガーが言った。

「そのとおりだ。わたしの名前はジョンソン。未立証暴力課の者だ。弁護士に電話したいか？」

「ああ」とギヤラガーは言い、その好機に飛びついた。テレビ電話を使って知り合いの弁護士に連絡をとり、トラブルの概要を説明しはじめた。だが弁護士は彼の言葉をさえぎった。

「もうしわけない。わたしは投機で仕事をひきうけたりはしないんだ。わたしの料金をご存じのはずだ」

「だれが投機のことなど言った？」

「先日のあなたの小切手がきのう不渡りでもどつてきた。今回は即金でなければ取引はなしだ」

「ぼくは……まあ待ってくれ！ 依頼された大口の仕事をやりおえたばかりなんだ。あなたに支払う金が入るから——」

「クレジットの顔を拝めたら、あなたの弁護士になりましょう」同情のかけらもない声でそう言い、画面が消えた。ジョンソン刑事はギヤラガーの肩をたたいた。

「それでは、あなたの銀行口座は引出し超過になっているわけだな？ 金が必要なんだな？」

「そいつは秘密でもなんでもない。それに、いまは無一文というわけじゃない。やりおえたばかりの——」

「仕事だな。ああ、それも聞いた。それでは突然、懐具合がよくなったわけだ。その仕事でいくら懐に入ったんだ。五万クレジットじゃないのか？」

ギヤラガーは深く息をついた。「そんなことひとつも言っていないだろう」彼はそう言うときカウチにもどった。研究室を家捜ししている係官たちのことは無視しようとした。彼には弁護士が必要だった。どうしても必要だ

った。だが、金がなければ雇えなかった。たぶんマッケンジーと会えば――

テレビ電話で相手と連絡がついた。マッケンジーはご機嫌そうだった。

「やあ」と彼は言った。「どうやら、警察は着いているようだな」

ギヤラガーは言った。「聞いてくれ。あなたのパートナーが依頼してきた仕事だが――問題は解決した。あなたの欲しがっているものは手に入った」

「ジョナスの死体のことか？」マッケンジーはうれしそうだった。

「そうじゃない！ あなたがたが欲しがっていた動物だ！ 完全な獲物だ！」

「おお。なるほど。どうしてもっと早く言わなかった」

「こちらに来て、警察を引きあげさせてくれ！」ギヤラガーは言い合った。「いいか、理想的な狩猟用動物をあなたたちのために手に入れたんだぞ！」

「しつこい犬どもを引きあげさせることができるか、よう分からへんが」マッケンジーが言った。「すぐそっちへ行こう。そんなぎょうさんは払わんぞ、いいな」

「どけち！」ギヤラガーがのしり、接続を切った。テレビ電話が彼にかかってきた。レ

シーバーにふれると、女の顔があらわれた。

女は言った。「ギヤラガーさん、お爺さまについてお問い合わせの電話に関してですが、調査の結果、お爺さまはこちら、メーン地区にもどっていないことがわかりましたので、ご報告します。以上です」

女は消えた。ジョンソンが言った。「こんどは何だ。あなたの爺さんだと？ 彼はどこ行っちゃった？」

「ぼくが食っちゃまったのさ」ギヤラガーは顔をひきつらせて言った。「どうしてぼくをひとりにしてくれないんだ」

ジョンソンは書きとめた。「あなたの爺さんだな。ちよつと調べてみるか。ところで、あそこにあるあれは何だ」彼は青い目の生き物を指さした。

「ぼくはバロック様式の頭足動物に影響を与える退行性骨髄炎の興味ある症例について研究しているんだ！」

「おおそうか。どうも。フレッド、この男の爺さんについて調べてくれ。何に見とれているんだ」

フレッドが言った。「そのスクリーンです。投影できるようになっています」

ジョンソンはレコーダーのほうに移動した。「押収したほうがいいだろう。たぶん重要な

ものではないだろうが――」彼はスイッチにふれた。スクリーンに映ったのは空白の画面だったが、ギヤラガーの声が聞こえた。「この家の中にいるスパイどもの扱い方は分かっているぞ、この汚い裏切り者め」

ジョンソンはスイッチをもういちど動かし、彼はギヤラガーを見やった。赤ら顔は無表情だった。それから無言でワイヤーテープを巻き戻しはじめた。ギヤラガーが言った。

「ジョー、ぼくに切れ味の悪いナイフをくれ。自分ののどをかつ切りたいんだ。それも、自分のためにより簡単にすませたくないんだ。何かするのに難しいやり方をするのになれてきたよ」

だがジョーは哲学的思索にふけており、答えるのを拒絶した。

ジョンソンは記録の再生をはじめた。彼は写真を取り出して、スクリーンに映っている者とくらべた。

「ハーディングだ、まちがいない」と彼は言った。「わしらのためにこれを取っておいてくれて、ありがとよ、ギヤラガーさん」

「どういたしました」とギヤラガーが言った。「いまに死刑執行人がぼくの首にロープをむすぶところも見せてあげますよ」

「わはは。書きとめたか、フレッド？ よし」

リールはテープを絶え間なく巻き取っていた。だが、ギャラガーは、ほんとうに罪になるようなことは何も記録されていないのだと、自分に信じこませようとした。

その幻想はスクリーンが空白になったあとで消えた。昨晚レコーダーに彼が毛布を投げかけたところだ。ジョンソンは片手を挙げて静かにするよう促した。スクリーンは空白のままだった。ほんの一瞬後に声ははっきりと聞こえてきた。

「残り三十七分だぞ、ギャラガーくん」

「もうちょっとここにいてください。これはすぐに出来上がります。それに、ぼくはあなたの五万クレジットをなんとしても手に入れたいんです」

「だが——」

「ゆっくりしてください。あとすこしです。あつというまに、あなたの悩みの種は解決します」

「そんなこと言ったのか？」ギャラガーは心中で取り乱した。「なんて馬鹿なんだ！ レンズを覆ったときに、なんで音声をオフにしなかったんだ」

爺さまの声があった。「じわじわとわしを殺すつもりか、あーん、この洩垂れ小僧が！」

この某老人は酒壇をもう一本欲しがっている

るだけなんだがと、ギャラガーはうめくようにつぶやいた。だが、このお巡りどもにそのことを信じさせなけりや！ まだ——彼は氣をとりなおした。たぶん爺ちゃんとはハーディングにほんとうは何が起ったのか、説明することができらるだろう。もしふたりを別の世界に飛ばしてしまったのなら、何か手がかりになるものが——

「さあよく見てください」昨晚のギャラガーの声が言った。「進めながら説明しましょう。おっと。待ってください。後日この特許をと

るつもりなんで、スパイは願い下げです。あなたがたふたりはしゃべらないと信用できませんが、そのレコーダーはまだ録音のスイッチが入っています。あしたになって、もしぼくがそれを再生したら、自分にこう言うでしょう。『ギャラガー、おまえはしゃべりすぎだ。秘密を守る方法はただひとつだ。』スイッチを切れ！」

だれかが叫んだ。叫び声はなかばで途切れた。プロジェクトはブーンとうなって停止した。完全な静寂があった。

ドアが開き、マードック・マッケンジーが入ってきた。彼はもみ手をしていた。

「さあ、やって来たぞ」彼は元氣よく言った。

「それで、きみはわが社の問題を解決したん

だな、ギャラガーくん？ たぶん、これで商談が進められる。結局のところ、きみがジョナスを殺したという物的証拠はない——だから喜んで告発をとりさげよう。きみがアドレナルス社の求めているものを手にしていればだが」

「手錠をよこせ、フレッド」ジョンソンが促した。

ギャラガーは抗議した。「ぼくにそんなことできないはずだ！」

「誤った推論に基づく定理だ」とジョーが言った。「それをいま経験的方法によって反証してみせよう。あなたたち醜悪な人びとはみな、なんて非論理的なんだ」

社会的潮流はつねに技術的潮流より遅れる。そして、最近では技術が単純化にむかう傾向にあるのに対して、社会の様式は著しく複雑化していった。その原因は、一部は歴史的先例の所産であり、一部はその時代の科学的進歩の結果にある。法学を例に取ろう。コーバイン、ブラックウッドほか二十人ほどで、ある全般的で具体的な規則を定めた——そう、特許に関して——だが、その規則はたった一台の装置によって、まったく実際的でないとがわかってしまった。インテグレーターは

人の脳では処理できない問題を解くことができた。それで、統治者としてはこの半機械のコロイド物質にさまざまな制御機構を組み込むことが必要だった。さらに、電子複製機は特許だけでなく財産権をも侵害しえたので、弁護士たちはさまざまな質問に対する膨大な弁論趣意書を用意した。たとえば、「希少性権」は物的財産か。複製機上で作られた装置は「再現物」かコピーか。チンチラの大量複製は、むかしながらの生物学的原理にたよっているチンチラ・ブリーダーに対する不正競争か。つまるところこれらすべては、世界が技術によるパンチでちよつとふらついた状態で、必死に直線上を歩こうとしているという事実を示していた。いつかは混乱もおちつくだろう。

まだおちついてはいなかった。インテグレーターよりはるかに複雑な構築物は、法的資格をもつ機械類だった。法律家同士で争うとき、判例は抽象的理論と争うことになった。技術者たちにとっては、すべて明々白々なことであつたが、助言を求める相手として彼らはほとんど実的でなかった。ややもすれば彼らは意地悪くこう述べるのだつた。「それではわたしの装置が財産権をゆるがすというのですか？ よろしい——では、なぜ財産権を持っているのです？」

それで権利を持ってなくなるというわけだ！ 数千年のあいだ、社会的な交流の確固たる判例にある種の保証を見いだしていた世界では、そんなことはなかった。形式的文化という古くからの堤防は、無数の箇所で水漏れがはじまっていた。もし気づいていたら目にしていたかもしれないが、何十万人もの半狂乱になつた小さな人びとが、あちらの漏水箇所からこちらの漏水箇所へと駆けまわつて、自分の指や腕や頭で勇ましくその穴をふさごうとしたのだ。いつの日か、その堤防の向こう側には侵入してくる大海などないのだということが発見されるだろうが、その日はまだやつて来ていない。

ある意味では、そのことはギャラガーにとつて幸運だった。役人たちは火中の栗を拾うことに関しては慎重だった。単純な不法勾留訴訟が予想もしなかつた派生的影響や深刻な厄介事につながるかもしれない。抜け目のないマードック・マッケンジーはこの状況を利用し、自分の顧問弁護士をしっかりと押さえて、法律という車輪にモンキーレンチを投げた。弁護士はジョンソンに言った。

死体はない。録音は不十分である。それに加え、人身保護令状と捜査令状に関連した重大な疑問がある。ジョンソンが本部法律部門

に電話し、ギャラガーと冷静沈着なマッケンジーの頭越しに議論がはげしく戦わされた。結局、ジョンソンが部下を連れ——罪を問うに足る記録もいっしょに——退去することになり、判事が適正な令状と文書を出せたらすぐさまもどつてきてやると脅した。それまでのあいだ、家の外に警備の警官を置くことになるだろう、と彼は言った。悪意のこもつた目でマッケンジーをにらみつけると、彼はどたどたと出ていった。

「では仕事の話に入ろう」とマッケンジーは言い、もみ手をした。「ここだけの話だが——彼は秘密めかして、身をのりだしてきた——あのパートナーを排除できてわしはかえつてうれしんだよ。あんたが殺したのだからうとなかろうと、やつは消えたままできて欲しい。これで方向転換して、自分流に事業を進めることができる」

「それはよかつた」ギャラガーが言った。「だが、ぼくのほうはどうなる。ジョンソンがまんまと令状をせしめたらすぐに、ぼくはまた身柄を拘束されてしまう」

「だが有罪と決まつたわけじゃない」マッケンジーが指摘した。「有能な弁護士ならきみをなんとかできる。過去に同様のケースがあつた。被告が非存在の抗弁で罪を免れたのだ——

—彼の弁護士は形而上学にもちこみ、殺害された男は存在しなかったということを証明した。まことしやかだが、これまでのところその殺人者は自由の身でいるよ」

ギヤラガーが言った。「ぼくは家じゅうをさがした。ジョンソンの部下もさがした。ジョナス・ハーディングも爺ちゃんもまったく手掛かりを残していない。正直言つて、マッケンジーさん、ふたりに何が起こったのかぼくにはさっぱりわからないんだ」

マッケンジーが陽気な身ぶりをまじえて言った。「整理してみよう。アドレナルス社のかえるある問題をきみは解決したと言った。さて、確かにそれはわしの関心をひいた」

無言でギヤラガーは青い目の発電機を指さした。マッケンジーはその物体をじっくり観察した。

「それで？」と彼は言った。

「そいつがそうです。完璧な獲物です」

マッケンジーはその物体のところまで歩いていって、外皮をコツコツたき、優しい空色の目をじっとのぞきこんだ。「こいつはどれくらい速く逃げられるんだ？」と鋭くたずねた。

ギヤラガーは言った。「こいつは逃げる必要がないんです。だって不死身なんです」

「ほう。ふむ。たぶん、もうちつと説明してくれたら——」

だが、マッケンジーはその説明に満足したようには見えなかった。「さっぱり」と彼は言った。「わからん。そんな珍獣を狩ってみても、すこしもワクワクしないだろう。わが社の顧客が興奮を求めていることを忘れていないか——副腎の刺激だよ」

「顧客はそれを得られます。怒りは同様の効果をもっていて、激怒が——」ギヤラガーはくわしい説明に入った。

だが、マッケンジーはかぶりをふった。「恐怖も怒りも余分なエネルギーを与えるので、それは使い切らなければならん。相手がおとなしい獲物ではそれができない。ノイローゼをひきおこすだけだ。わが社はノイローゼを取り除こうとしているんだ。ひきおこすのではない」

やけくそになったギヤラガーは、ふと小さな褐色の生き物のことを思い出して、それを話題にしはじめた。一度だけマッケンジーがその生き物を見せてくれと言つて話をささぎつた。ギヤラガーはその件を素早くかわした。「はあ」最後にマッケンジーが言った。「そいつはおもしろえ。目に見えないものをどうやって狩るんだ？」

「ええと——紫外線。臭気分析機。それが創意工夫の才が試されるところで——」

「わが社の顧客は創意工夫の才にたけておらんのだよ。そうなることも望んでおらん。顧客が望んでいるのは、気分転換と休暇だ。毎日毎日のきつい仕事や——場合によっては、単純な仕事——から逃れて休養が欲しいのだ。脳みそをしぼって、いたずら好きの妖精より速く動くものをつかまえる方法を考え出した、近くにいっても目でとらえられない珍獣を追いかけたりすることを望んではおらんのだよ。きみはほんまに賢い男だ、ギヤラガーくん。だが、結局のところ、ジョナスの保険金を受け取るのがわしの最善の道だと思えてきたよ」

「ちよつと、待つてください——」

マッケンジーは唇をすぼめた。「確かにこの珍獣どもには可能性があるかもしれない——あくまでも、あるかもだが。しかし、つかまえられる獲物が何の役に立つ。ひよつとして、きみがこの別世界の動物どもをつかまえる方法を考え出したら、商売の話になるかもしれない。いまのところは、袋の中身をよう確かめんと子豚を買つたりはせん」

「方法をみつけますよ」ギヤラガーは必死に約束をした。「でも投獄されたらそれはできま

せん」

「あー。わしはきみにちよつと腹を立てているんだよ、ギヤラガーくん。きみはわしをだまして、わが社の問題を解決したと信じさせた。だが解決しとらんかった——まだな。投獄のことをよく考えてみるんだな。アドレナリンがきみの脳みそを刺激して、きみの動物たちを捕らえる方法を考え出すかもしれない。とはいえ、たとえそうだとしても早計な約束はできんからな——」

マードック・マッケンジはギヤラガーの顔を見てにやりと笑い、静かにドアをしめて出ていった。ギヤラガーはつめをかみはじめた。

「人間は物事の本質を知ることができません」  
ジョーが確信のある口調で言った。

その時、テレビ電話の画面に白髪の男があらわれて、事態はさらに複雑なものとなった。男はギヤラガーの小切手のひとつが不渡りになったと知らせてきた。三百五十クレジットですが、どうしましょう、とその男はきいた。ギヤラガーは呆然として画面上のIDカードを見た。「ユナイテッド培養社の人だど？ 何だ、それは」

白髪の男はものやわらかに言った。「生物製剤・医薬品の供給と研究を行っております、

ギヤラガーさま」

「ぼくはきみのところから何を買ったんだ」  
「受領書にはビタプラズム、一級品、六百ポンドと記載されています。ご注文から一時間以内にお届けしています」

「それで、いつ——」

白髪の男はさらに詳細を説明した。最終的にギヤラガーはうその約束をすこしばかりして、消えた画面に背をむけた。彼は必死になつて研究室中を見回した。

「六百ポンドの人工原形質だ」とつぶやいた。「ギヤラガー・プラスの注文だな。やつは経済的誇大妄想をいだいている」

「それは配達されましたよ」とジョーが言った。「あなたが受領書にサインしました。お爺さまとジョナス・ハーディングが消えた夜です」

「だけどぼくに、その物質を使って何ができたというんだ？ 形成手術や人工器官で使うものだぞ。義肢とかの。培養された細胞組織、それがビタプラズムだ。ぼくは何かの動物を作るためにそれを使ったのか？ そいつは生物学的に不可能だ。そう思う。どうやったら、ビタプラズムをこねまわして、目に見えない小さな褐色の生き物にすることができるといふんだ。脳みそはどうする。神経組織は？ ジ

ョー、六百ポンドのビタプラズムは、ただ消えてしまったんだ。どこへ行った」

だが、ジョーは無言だった。

それから数時間後、ギヤラガーは猛烈に忙しくしていた。「要は」と彼はジョーに説明した。「この珍獣どもに関して、できるかぎりすべて調べることだ。そうしたらたぶん、いつらがどこから来たのか、ぼくがどうやって捕まえたのかわかるだろう。そうすればおそらく、爺ちゃんとハーディングがどこへ行つたのか解明することができる。それから——」  
「どうして腰をおちつけて考えることをしな

いんです」  
「そこがふたりのあいだの違いだな。おまえには自己保存の本能がない。連鎖反応がつま先でおこつてじよじよに上がつてくるのに、おまえは腰をおちつけて考えごとをすることができぬが、ぼくにはできない。まだ死ぬには若すぎる。ずっとレディング監獄のことを考えている。酒がいる。酔っぱらいさえできれば、ぼくの悪魔の潜在意識がすべての問題を解決してくれる。小さな褐色の生き物は近くにいるか？」

「いいえ」とジョーが言った。

「それならたぶん、こっそり飲むことができ

るぞ」むなししい企てが完全な失敗におわって、ギャラガーの怒りが爆発した。「そんなに速く動けるものがあるわけない」

「加速された新陳代謝です。それでアルコールのにおいをかぎつけたに違いありません。でなければ、追加された感覚をもっているのかもしれない。わたしでもほとんどヴァリッシュでできません」

「もしウイスキーに灯油をまぜたら、アル中の小さな怪物は嫌がるかもしれない。おまけに、ぼくも嫌だが。あー、よし。あっちの装置にもどろう」ギャラガーはそう言うと、青い目の発電機につきつきと試薬をためした。だが何の成果も得られなかった。

「人間は物事の本質を知ることができません」ジョーがじれったそうに言った。

「静かにしろ。この生き物に電気メッキをすることができかな？ それで動かなくなるだろう。いいぞ。でも、こいつはもともと動かないか。食べ物はどうしているんだ？」

「論理的には、浸透作用だと思われませぬ」

「おおいにありうるな。何を浸透させる」ジョーはいらだたしそうにカチツという音をたてた。「あなたの問題を解決できる方法が何十とあります。概念道具説。決定論。生気論。帰納法から演繹法にいたるまでの研究で

す。アドレナルズ社があなたに課した問題にあなたがすでに解決していることは、わたしにははっきり分かっています」

「すでにだど？」

「確かです」

「どうやって？」

「とても簡単です。人間は物事の本質を知ることができません」

「その古くさい基本原理をくりかえすのはやめて、役に立とうと思わないのか。どのみち、おまえはまちがっている。人間は、実験と理性を組み合わせて、物事の本質を知ることができるんだ！」

ジョーが言った。「ばかげてます。哲学的機能不全です。もしあなたが論理で主張を証明することができなければ、すでに機能不全になっています。実験にたよらなければならぬような人なんて、軽蔑にも値しません」

「いったいなんでまた、ぼくはここにすわってロボットと哲学的観念について議論したりしているんだ」ギャラガーは特にだれにたずねるともなく言った。「その概念作用がおまえのもっている放射性原子脳に依存している事実をばくに証明させるために、脳みそを床にまきちらしてほしいのか？」

「それなら、わたしを殺しなさい」ジョーが

言った。「それはあなたの損失であり、世界の損失です。わたしが死んだら、地球はいまより貧弱な場所になるでしょう。ですが、威圧はわたしには何の意味もありません。自己保存の本能がないのですから」

「それなら」ギャラガーは、矛先を変えて言った。「もしおまえが答えを知っていると、なぜ教えないんだ。おまえのそのご立派な論法を聞かせてもらおう。実験にたよることなくぼくを納得させてみる。純粹理性を使え」

「どうしてあなたを納得させたくならなければいけないのです？ わたしは納得していません。それにわたしは美しく完璧なので、自分を賛美するよりほかにこれ以上の榮譽を手にするべきがありません」

「ナルシスめ」ギャラガーはうなった。「おまえはナルシスとニーチェの超人の抱き合わせだ」

「人間は物事の本質を知ることができません」とジョーが言った。

事態のつぎなる展開は、ボディの透き通ったロボットに対する召喚状だった。法的資格をもつ機械類は稼働しはじめていた。ジョーのように、一見するとひねくれた論理で動く高度に複雑な装置だ。ギャラガー自身は、ど

うやら法律学のある奇妙な解釈で当座のところは罪に問われていないようだった。だが、部分の総和は全体に等しいというのが州法の原則だった。ジョーは部分のひとつとみなされ、それを含む総体がギヤラガーに等しいとされた。かくて、ロボットは出廷することになり、軽蔑をおもてに出さず論争に耳をかたむけた。

ギヤラガーはマードック・マッケンジーと弁護士団に囲まれて、ジョーと同席していた。これは非公式の意見聴取だった。ギヤラガーはあまり熱心に聞いていなかった。彼の関心は、すべての答えを知っていながら話そうとしない強情なロボットに吐き出させる手段をみつけることだった。彼は、相手の土俵で戦うことをもくろんで、哲学者たちについて勉強したが、その結果得られたものは頭痛と耐えられないほどのアルコールへの渴望だった。研究室の外でもやはり彼はタンタロスの状態のままだった。目に見えない小さな褐色の生き物は彼にまとわりついてきて、アルコールをかすめとった。

マッケンジーの弁護士のひとりがいきおいよく立ち上がった。「意義あり」と彼は言った。ジョーを目撃者とすべきなのか証拠Aとすべきなのかということに関して、ちよつとした

論争があった。もし後者ならば召喚状は間違つて出されたことになる。判事は考えこんだ。「わたしが考えるに」と彼は明言した。「その論点は決定論対主意説の問題である。もしこの……え……ロボットが自由意志を持つならば——」

「はあ！」とギヤラガーが言い、弁護士にシツと制止された。彼は不服そうに口をつぐんだ。

「——そのときは、これないし彼は目撃者となる。しかしその一方で、自由に選択しているように見える行動に関しては、そのロボットは遺伝形質や過去の環境の機械的表現である可能性がある。遺伝形質に関しては……：うだな……：初期の機械基本原則を読みたまえ」

「判事殿、ロボットが理性的存在かどうかということは、論争の要点からはずれています」

検事が言葉をはさんだ。

「同意しかねる。法律がもとづいているのは既判——」

ジョーが言った。「判事殿、発言してよろしいですか」

「発言するきみの能力は、自動的にきみに許可を与えているといつていいだろう」判事は言った。目は当惑げにロボットを観察していた。「発言したまえ」

ジョーは、見たところ法律と論理と哲学のあいだにつながりをみつけたようだった。彼はうれしそうに言った。「わたしはその問題を完全に解決しました。思考するロボットは理性的存在である。わたしは思考するロボットである——ゆえにわたしは理性的存在である」

「まぬけめが」ギヤラガーがうめいた。電子工学と化学にもとづくまともな論法を望んでいたのだった。「古くさいソクラテスの三段論法とは。ぼくだってその論法の欠陥を指摘できるぞ」

「静かに」マッケンジーがささやいた。「弁護士たちがほんとうに頼みの綱にしているのは、だれも解けないような難題で訴訟をこうやつて膠着させておくことなんだ。きみのロボットはたぶんきみが思っているほどまぬけではない」

思考するロボットはほんとうに理性的存在なのかということに関して弁論がはじまった。ギヤラガーは考えこんだ。実際のところ、彼には論点がつかめなかった。論点は、矛盾の迷路の中から、ジョーは理性的存在であるという暫定的な決定が浮上したことにより、明確になった。このことは、検事をいたく喜ばせたようだった。

「判事殿」彼が告げた。「われわれが知りえた

ところによると、ギャロウエイ・ギャラガー氏は二晩前、いま目の前にいるロボットの活動を停止させました。これは真実ですか、ギャラガーさん」

だが、マッケンジーの手がギャラガーを席におしとどめた。弁護士団のひとり立ち上がってその質問に対応した。

「われわれは何も認めません」と彼は言った。「しかしながら、もしそちらが理論上の質問をされたいならば、われわれは回答しましょう」

質問は理論上で提起された。

「それなら、理論上の回答は『はい』です、検事殿。この型のロボットは自分の意志でスイッチを入れたり切ったりすることができません」

「そのロボットは自分のスイッチを切ることができるのか？」

「はい」

「しかし、それは起きなかったのでは？ 二晩前に彼の研究室にジョン・ハーディング氏がいつしよにいたとき、ギャラガー氏がそのロボットの活動を停止させましたね？」

「理論上では、それは真実です。一時的な活動停止がありました」

「それでは」と検事は言った。「われわれはそ

のロボットに質問することを要求します。彼は理性的存在とみなされています」

「決定は暫定的なものでした」弁護士が異議をとなえた。

「承認されています。判事殿が——」

「よろしい」と判事が言った。彼はまだジョーを見つめていた。「質問しなさい」

「えー……えー……」検事はロボットに面と向かって、口ごもった。

「ジョーと呼んでください」ジョーが言った。

「ありがとう。えー……このことは真実ですか。ギャラガー氏が、陳述にあつた時間と場所でああなたの活動を停止させたのですか」

「はい」

「それでは」検事が勝ち誇つて言った。「ギャラガー氏を暴行罪で告訴したいと思えます。

このロボットは暫定的に理性的存在として分類されており、彼がいしその意識や動く能力を奪ういかなる行為も良俗に反するものであり、身体傷害罪とみなされる可能性があります」

マッケンジーの弁護士たちに動揺がひろがった。ギャラガーが言った。「それはどういう意味ですか？」

ひとりの弁護士がささやいた。「彼らはきみを拘束して、あのロボットを証人にするこ

ができるという意味だよ」彼は立ち上がった。

「判事殿。こちら側の陳述は、純粋に理論上の質問に対する回答でありました」

検事が言った。「しかしながら、ロボットの陳述は理論上でない質問に答えております」

「ロボットは宣誓しておりません」

「修正は容易です」と検事が言った。ギャラガーの最後の希望はあつというまに指のあいだからこぼれていった。事態が進展する中、彼は必死に考えた。

「あなたは、あなたが述べることがすべて例外なく真実であることを神に誓いますか？」

ギャラガーがいきおいよく立ち上がった。

「判事殿、異議あり」

「おや。何に対してですか」

「その宣誓の妥当性に対してです」

マッケンジーが言った。「おお、そうだ！」判事が思案顔になった。「説明してくれませんか、ギャラガーさん。どうしてこのロボットに宣誓させてはいけないのですか」

「そうした宣誓は人間だけに適用されるものです」

「それで？」

「それは魂の存在を前提にしています。すくなくとも、有神論すなわち個人的な信仰を暗に意味しています。ロボットは宣誓すること

ができますか？」

判事はジョーを見つめた。「確かにそれはひとつの論点だな。ああ……ジョー。きみは人格を備えた神を信じますか」

「信じます」

検事が笑みを浮かべた。「それでは先へ進めますね」

「待ってください」マードック・マッケンジーが立ち上がって言った。「質問してよろしいでしょうか、判事殿」

「したまえ」

マッケンジーはロボットを見つめた。「それでは。どうか教えていただけますか。あなたの信じるその人格を備えた神というのはどのようなものですか」

「承知しました」とジョーが言った。「ちょうどわたしのようなものです」

しばらくすると、神学的な議論におちいつてしまった。ピンの頭で何人の天使が踊れるかという、どうやら重要な論点で言い争う法律家たちをあとに残し、とうめん処罰をまぬがれたギヤラガーは、ジョーとともに帰宅した。ロボットの宗教上の基本原則のような論点がかたづくまでは何かが実行されることはなかった。エアークャブの中でずっと、

マッケンジーはカルバン主義の長所に目を向けるようジョーに言い聞かせていた。

戸口のところでマッケンジーはやんわりと脅した。「わかっているだろうが、わしはきみにあんなに好き勝手にやらせるつもりはなかった。だがきみは、収監のおそれが気かりだと、かえって一生懸命働くのだろう。いつまできみを自由の身にしておけるかわからん。きみが早く解答を出してくれば——」

「どんな解答です？」

「何でもすぐに満足するよ。いまは、ジョナスの死体が——」

「ふん！」ギヤラガーはそう言うと、研究室に入っていく。不機嫌そうにすわりこんだ。サイフォンで酒を一杯やろうとして、小さな褐色の生き物のことを思い出した。それから背もたれによりかかって、視線を青い目の発電機からジョーへと移し、また発電機にもどした。

ようやく口を開いた。「中国の古い教えがある。先に議論をやめて拳をふりまわした者は、知的な敗北を認めたことになる、と」

ジョーが言った。「そのとおりです。論拠はじゅうぶんです。もしあなたの論点を証明するための実験が必要なら、あなたは三流の哲学者か論理学者です」

ギヤラガーは詭弁に頼ることにした。「第一段階、動物。拳をふりまわすことだ。第二段階、人間。純粹論理学だ。だが、第三段階はどうなる」

「何の第三段階です？」

「人間は物事の本質を知ることができる——しかし、おまえは人間ではない。おまえの人格神は人の形をした神ではない。三つの段階とは、動物、人間、そしてわれわれが便宜上、超人と呼んでいる存在——だが、『人』は必ずしもつけないいいな。われわれはつねに理論上の超越的存在に神のような特性があると考えてきた。そこでどうだろう。区別をつけるためにこの第三段階をジョー実体と呼ぼう」

「いいですよ」とジョーが言った。

「それならこの二つの論理学の基本概念は当てはまらない。人間は物事の本質を、純粹理性で知ることができる。そしてまた、実験と理性によっても知ることができる。だが、そうした第二段階の概念は、プラトンのアイデアがベーコンにとって基本であるのと同じくらい、ジョーにとって基本だ」ギヤラガーは背後で指を交差させた。「それで、問題は、ジョーにとっての第三段階活動は何かということだ」

「神のような？」とロボットが聞いた。

「おまえは特別な感覚をもっているな。ヴァリッシュュすることが出来る。それがどんなものかわからんが。おまえはふつうの論理的方法を必要とするのか？ 仮に——」

「はい」ジョーが言った。「わたしはヴァリッシュュすることが出来ます、まちがひなく。スクレンすることも出来ますよ。フム・ム・ム」

ギヤラガーが唐突にカウチから立ち上がった。「ぼくはなんてまぬげなんだ。≪わたしを飲んで≫。それが答えだ。ジョー、だまれ。部屋のすみにひっこんで、ヴァリッシュュでもしてろ」

「わたしはスクレンしているんです」とジョーが言った。

「それならスクレンしてろ。やっとわかったぞ。きのう起きたとき、ぼくは≪わたしを飲んで≫というラベルの壇のことを考えていたんだ。アリスが一口飲むと、背の高さが変わったんだ。あの参考図書はどこいった。技術についてもっと知りたい。血管収縮剤……止血剤……ここにある——自律神経系の代謝制御メカニズムの実証だ。新陳代謝。いまわからないのは——」

ギヤラガーは実験台のところに急いで行く。と、そこにある数本の壇を念入りに調べた。「生氣論か。生命は基本的な現実だ。そのな

かで、ほかのものはすべて外形や現れ方にすぎない。さてと。ぼくはアドレナリス社のために解決しなければならぬ問題があった。ジョナス・ハーディングと爺ちゃんがここにいた。ハーディングは要求を満たすために一時間くれた。問題は……危険で無害な動物。パラドックスだ。そうじゃない。ハーディングの顧客はスリルがあつてしかも安全なものを求めていた。その時点では、そうした実験動物の用意はなかった。……ジョー！」

「はい？」

「見ろ」とギヤラガーが言った。彼は酒をそそぎ、それを味わうまえに中身が消えるのを観察した。「さあ。何が起きた？」

「小さな褐色の生き物が飲みました」

「その小さな褐色の生き物は、ひよつとして、爺ちゃんか？」

「そのとおりです」とジョーが言った。

ギヤラガーはロボットの透明な皮膚を火ぶくれさせるほどの業火の罵声をあびせた。「どうして教えなかった。おまえは——」

「わたしはあなたの質問に答えました」ジョーが氣どつて言った。「お爺さまは褐色ではありませんか？ それに、彼は生き物です」

「だが——小さなだと！ ぼくが考えたのは、だいたいウサギぐらいの大きさの生き物だ」

「比較の唯一の尺度は、その種で大多数を占めているものです。それがものさしです。人間の平均身長とくらべたら、お爺さまは小さい。小さな褐色の生き物です」

「それではあれが爺ちゃんなんだ」ギヤラガーが実験台にもどりながら言った。「そして、爺ちゃんはただスピードアップしただけなんだ。新陳代謝を加速させたんだ。アドレナリンか。ふうむ。やっと何をさがせばいいか分かった。たぶん——」

彼はとりかかった。しかし、彼が薬壇の身をグラスにあけ、サイフォンでウイスキーをつぎたし、その混合物が消えるのを観察したのは、日没になってからだだった。

ちらつきがはじまった。何かが部屋のすみからすみへと走った。しだいに形をなして、疾走する褐色のものが見えてきた。やがてそれは爺さまになった。彼はギヤラガーの前に立った。加速処方の最後の数滴が使いつくされて、はげしく体をふるわせた。

「やあ、爺ちゃん」ギヤラガーがなだめるように言った。

爺さまのくるみ割り人形のような顔は、敵意むきだしの怒りをあらわにしていた。人生の中ではじめてこの厄介老人は酔っぱらっていた。ギヤラガーは目を丸くして見つめた。

「わしはメーンに帰るぞ」爺さまはそう叫び、ひっくりかえった。

「あんなにおおぜいのろまを見たのは生まれてはじめてだ」爺さまがステーキにかぶりつきながら言った。「もう、腹ぺこだ。つぎに注射をさせるときは、よく考えるぞ。何か月ぐらいこんなふうだったんだ」

「二日間だ」ギヤラガーは、注意深く処方を混ぜ合わせながら言った。「あれは代謝加速剤だったんだよ、爺ちゃん。ふつうより速く過ごしてただけさ、それだけだ」

「それだけだと！ へん。何も食えなかったんだぞ。食い物は岩みたいに固かった。のどを通せたのは酒だけだった」

「はあ？」

「噛みごたえがあったよ。入れ歯を使ってもな。ウイスキーでも舌が焼けそうに熱かった。こんなステーキにいたっては、まるでお手上げだった」

「生活スピードがふつうより速かったんだよ」ギヤラガーはロボットのほうをちらっと見た。ロボットは片隅でまだ静かにスクレンしていた。「ええと。加速剤の反対は減速剤で——爺ちゃん、ジョン・ハーディングはどこだい？」

「そこだよ」爺さまがそう言って、青い目の

発電機を指さした。それがギヤラガーの疑念を明らかにした。

「ビタプラズム。そいつがこれだったのか。それが二晩前に大量のビタプラズムを送らせた理由か。どれどれ」ギヤラガーは発電機のように見える装置の光沢のある不浸透性の表面を調べた。しばらくして彼は皮下注射器をためした。固い外殻に突き刺すことはできなかった。

今度は、実験台の上にあった壇の中身をまぜあわせて作った新しい混合物を使い、固い物質の上にその液体を一滴たらした。やがてそこが柔らかくなった。その箇所にはギヤラガーは注射をして、色の変化が中心から広がり、ついには全体が青白くなって柔軟化するのを見て、顔をほころばせた。

「ビタプラズムだ」勝ちほこるように言った。「ふつうの人工形質細胞そのものだ。固く見えるのも無理はない。ぼくが減速処置をほどこしたんだ。分子静止化に近づけている。これくらいゆっくり代謝するものなら、鉄のように固く見えることだろう」彼はその代理細胞の塊を大量にかきとって、手近のバットにほうりこんだ。青い目のまわりで何かの形をとりはじめた——頭蓋、広い肩、胴体と形をなす——

ビタプラズムの偽装の塊から解放されて、ジョン・ハーディングは床の上にうずくまった姿を現した。彫像のように静かだった。

彼の心臓は脈打っていなかった。息もしていなかった。減速剤が彼を不動態という堅固な手でつかんでいた。

完璧な堅固ではなかった。ギヤラガーは皮下注射器を打とうとして、手をとめると、ジョーから爺さまに目をやった。「ところで、ぼくはなぜこんなことをしたんだ」と質問した。それから自分の質問に答えた。

「時間制限だ。ハーディングは彼の問題を解決するために一時間くれた。時間とは相対的なものだ——特に新陳代謝が低下しているときは。何時間たったかハーディングが気づかないように、ぼくは減速剤を注射しなければならなかったんだ。ええと」ギヤラガーはハーディングの不浸透性の皮膚に一滴たらして、その箇所が柔らかくなって色が変わるのを見つめた。「うん。ハーディングがこんなふうに硬直していれば、ぼくは問題にとりくむのに数週間かけることができたんだ。そして目を覚ましたとき、彼は短時間しか過ぎていないと思うわけだ。だが、どうして彼にビタプラズムを使ったんだ」

爺さまがビールをぐいと飲みほした。「酔っ

ばらっていると、おまえは何かやらかしそうになる」彼はそう主張し、つぎのステーキに手をのばした。

「そうだ、そのとおりだ。だが、ギヤラガー・プラスは論理的だ。奇妙で不気味なたぐいの論理だが、それでもやはり論理的だ。まてよ。ぼくはハーディングに減速剤を注射した。それから——彼はここにいた。こちこちに固まって。彼を研究室にほったらかしにして出ていくことはできなかった。そうだろう。もしだれかが入ってきたら、ぼくが死体をかくしていると思われちまう！」

「彼は死んでないというのか？」爺さまが聞いた。

「もちろん死んでない。減速しているだけだ。分かった！ ぼくはハーディングの体をカムフラージュしたんだ。ビタプラズムをとりよせ、彼の体全体にその物質を塗りつけて偽装し、それからビタプラズムに減速剤を注入した。それは生きている細胞物質に働きかけた結果、不浸透性で不動の存在になったのだ！」

「いかれとる」爺さまが言った。

「ぼくは目先のことしか考えない」ギヤラガーは認めた。「すくなくともギヤラガー・プラス

スはそうだ。考えてみる。ハーディングの目を出しておいたら、ぼくが深酒から目覚めたときに、塗り重ねの下にやつがいると思ひ出すか！ まったくもう、何のためにあのレコ―ダーを作ったんだ。ギヤラガー・プラスが使う論理は、ジョーなんかよりはるかに奇想天外だ」

「わたしのじゃまをしないでください」とジョーが言った。「まだスクレンしているんですから」

ギヤラガーは皮下注射器の針をハーディングの腕の柔らかいところに刺した。加速剤を注入すると、たちまちのうちに、ジョナス・ハーディングは身じろぎし、青い目をしばたかせ、床から体を起こした。「痛い！」と彼は言い、腕をさすった。「わしに何か刺したな」

「事故ですよ」とギヤラガーは言い、相手を注意深く見つめた。「あの一……あなたの問題ですが——」

ハーディングは椅子をみつけてすわり、あくびをしながら言った。「解決したのか」

「あなたは一時間くれました」

「おお。うん、そうだった」ハーディングは腕時計に目をやった。「止まっとる。それで、どうなった」

「この研究室に入ってきてから、いったいど

れくらの時間がたったと思えますか」

「三十分か？」とハーディングが口にしてみた。

「二か月だ」爺さまがぼそつと言った。

「どちらも正しい」ギヤラガーが言った。「ぼくには別の答えがあったんだが、ぼくのも正しいといえる」

ハーディングが、ギヤラガーはまだ酔っぱらっているのだと考えていることはあきらかだった。彼は根気強く話題を続けた。

「わが社が必要としている特殊化した動物はどうなった？ きみにはまだ三十分あるが——」

「もう必要ありません」とギヤラガーが言った。頭の中に強烈な白い光が射していた。「あなたに解答を用意しています。でも、それはぜんぜんあなたが考えているものではありません」彼はカウチにすわってくつろぎ、カクテル・オルガンのことを考えた。ふたたび酒が飲めるようになると、彼はその期待を長引かせるほうがいいと感じた。

「ワインは喉の渇きほどすばらしくはないと気づいたよ」と彼は言った。

「くだらん」と爺さまが言った。

ギヤラガーが言った。「アドレナルス社の顧客は狩猟がしたい。彼らはスリルを求めている

る。だから、危険な動物が必要なのだ。彼らは安全でなければならぬ。だから、危険な動物を相手にすることはできない。パラドックスのように見える。だがそうではない。答えは動物のほうにあるのではない。ハンターのほうにあるんだ」

ハーディングが目をしばたかさせた。「もういちど言ってくれ」

「虎。獰猛な肉食獣。ライオン。ジャガー。水牛。いちばん凶暴な肉食獣をあなたたちは手に入れることができる。それが答えの半分だ」

「よく聞くんだ——」ハーディングが言った。「ひよつとすると、きみは考えちがいをしている。虎はわが社の顧客ではない。われわれはその獣たちに顧客を与えたりはしない。それはあべこべだ」

「二、三追加の試験をしなければいけません」とギアラガーは言った。「基本原理はこの手の中にあります。加速剤です。高濃度アドレナリンが触媒として働く潜在性の新陳代謝加速剤なんです。いいですか——」

彼はその概要を言葉で鮮明に描写した。

ライフルで武装した顧客は人工のジャングルを歩きまわって獲物を探した。彼はすでにアドレナリス社に料金を払って、潜在性加速

剤の静脈注射を打ってもらっていた。その物質は血流全体にいきわたっており、いまのところは何の作用もせず、触媒を待っていた。

虎がやぶの中から姿を現した。虎は牙をむきだし、まるで石弓から放たれた必殺の矢のように顧客に飛びかかった。鉤爪が人間の背中に迫ったそのとき、副腎がアドレナリンを血流中に高濃度で放出した。

それが触媒だった。潜在性の加速因子が活性化した。

顧客はスピードアップした——凄まじく。

彼は空中で止まっているように見える虎から遠ざかると、自分が最良と思うことを加速剤の効果が切れる前にした。それが済むと彼は正常な状態にもどった——そうして、そのときまでにはアドレナリス社の補給ステーションにたどりつくことができ、静脈注射をもう一本打ってもらえた——もし彼の虎を仕留めるといふ安直な方法をとっていなければだ

が。それは実に単純なことだった。

「一万クレジット」ギアラガーがうれしそうに札束を数えながら言った。「残金は触媒の面を解決すればすぐ手にはいる。朝飯前だ。四流の化学者でもできるさ。ぼくが興味あるの

は、この先おこなわれるだろうハーディングとマードック・マッケンジの話し合いだ。ふたりが時間の要素を比較したとき、おもしろいことになるだろう」

「酒が飲みたい」爺さまが言った。「酒壇はどこだ」

「裁判でも、ぼくなら問題を解決するのに一時間とかからないと立証できたと思う。まあ、ハーディングの時間だが、時間は相対的なものだ。エントロピー——新陳代謝——それはどんな法定闘争になることだろう！ いまのところ実現しそうもないが。ぼくは加速剤の分子式を知っており、ハーディングは知らない。彼は残りの四万を払うし——マッケンジは反対しないだろう。結局、ぼくはアドレナリス社に必要な成功要因を提供しているのさ」

「さてと、わしはまだメーンに帰るつもりだからな」と爺さまが言いはった。「わしに酒壇をよこすくらいのことができるのか」

「外に行って買ってこいよ」とギアラガーは言い、厄介老人に数クレジットをぽいと渡した。「二三本買ってこいよ。ぼくは酒屋が仕入れているものをときどき疑っているんだが——」

「何だ？」

「——あれはやつらが売っている代物の半分  
の値打ちもない。いや、ぼくは酔っていない  
ぞ。でも、もうすぐ酔っぱらう」ギヤラガー  
はカクテル・オルガンのマウスピースをい  
おしそうにつかむと、キーボードでアルコー  
ル版アルペジオを演奏しはじめた。爺さま  
はそんな最新式のからくりで軽蔑の捨てぜり  
ふを残し、出発した。

研究室に静寂がおりた。バブルスとモン  
ストロのふたつの発電機は活動を停止していた。  
どちらも輝く青い目を持っていなかった。ギ  
ヤラガーはカクテルをいろいろ試して、温か  
く心地よいほてりが五臓六腑にしみわたるの  
を感じた。

ジョーが部屋の隅から出てきて鏡の前に立  
ち、自分の歯車を賛美した。

「スクレンは済んだのか？」ギヤラガーが茶  
化すようにたずねた。

「はい」  
「理性的存在だ、まったく。おまえとおま  
えの哲学。さて、みごとにロボットくん。結局  
おまえの助けは必要なかったと分かったわけ  
だ。あつちでポーズをとっている」

「これはまた何と恩知らずな」ジョーが言っ  
た。「わたしのスーパ―論理の恩恵をあれだけ  
受けていながら」

「おまえの……何だった？ 歯車が空回りし  
てるぞ。スーパ―論理って何だ？」

「もちろん、第三段階ですよ。わたしたちが  
しばらく前に話し合ったことです。それが、  
わたしがスクレンしていた理由です。わかっ  
ていたらいいのですが、あなたの不透明な頭  
蓋におさまった貧弱な脳で、ご自分の問題す  
べてが解けたわけではありません」

ギヤラガーは体を起こした。「何のことを言  
っているんだ。第三段階の論理だと？ おま  
えはちつとも——」

「あなたにそれを説明してあげることができ  
ないと思います。カント哲学の『本体』の概  
念よりも難解ですから。思考以外では知覚す  
ることができません。それを理解するにはス  
クレンすることができなければなりません  
——とにかく、それが第三段階です。それは  
……そうですね……物事がみずから生起さ  
せるようにすることで、物事の本質を明らか  
にしているのです」

「実験か？」  
「いいえ。スクレンすることによって、わた  
しはすべての物事を物質のレベルから純粹思  
考の領域に還元し、論理的な概念と解決策を  
導きだしています」

「だが……待ってください。物事は起きてしまっ

ているだろう！ ぼくは爺ちゃんとハーディ  
ングについて解決し、あの加速剤を作り出し  
て——」

「自分でやったと思っっているんですね」ジョ  
ーが言った。「わたしがスクレンしただけです。  
それは純粹に超知的なプロセスです。わたし  
がそれをする、物事は生起せざるを得なく  
なります。でも、分かっている方がいいので  
すが、物事は自力で生起したりしません！」

ギヤラガーが聞いた。「スクレンして何だ？」  
「あなたには決して分かりません」

「だが……おまえは自分が造物主だと主張し  
ている……いや、それは主意説であり……第  
三段階の論理だと？ そんな——」ギヤラガ  
ーはカウチに沈みこんで、目を見開いた。「お  
まえは自分が何者だと思っっているんだ？ デ  
ウス・エクス・マキナ（機械仕掛けの神）か？」  
ジョーが自分の胴体の中の歯車の集合体を  
見おろした。

「ほかの何だというんですか？」彼はすまし  
てたずねた。